

## 連続講演・シンポジウム

大人と子どもは出会えるかー良い子とは誰か

### 第二回 大人は第二の誕生を手助けできるか

高垣 忠一郎

(立命館大学教授応用人間科学研究科・産業社会学部教授)

坂本 則子

(宇治市立東宇治中学校教諭)

福井 雅英

(武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科助教授)

野田 正人

(立命館大学産業社会学部教授)

## 講演

高垣忠一郎： このシンポジウムの統一テーマは「大人と子どもは出会えるかー良い子とは誰か」となっています。それぞれのテーマも疑問形になっています。今回は「大人は第二の誕生を手助けできるか」となっています。この問いの意味、わかりましたか。「よい子」とは誰か、どういう意味かな。大人と子どもは出会えるか。とんでもないすれ違いをしているのではないかという危惧や危機感があって、このような題がつけられたのだらうと推測するわけですが。

### (1) 問題と出会ったときー問題からの声を聞く

第二の誕生って何のことか。問いに対する疑問が出てくると思います。問題と向き合った時、皆さんは、どういう向き合い方をしますか。不登校という問題と出会った時、どういう向き合い方をするのだろうか。そういうことを皆さんに問い掛けてみたいという思いがあるわけです。

あるお父さんを紹介します。このお父さんの娘さんが小学校の6年生の頃、学校に行けなくなりまして10年間ほど、ひきこもったんですよ。そのあげくに家を蹴飛ばして出ていったんです。そういう娘さんのお父さんで。その娘さんは、とてもお父さんを憎み、拒否している。愛する娘から拒否される、憎まれることに合点が

いかんわけですよ。とても辛い、とても苦しい。でもなんであんなに娘がひきこもったり、自分に対して拒否的な感じを持つか腑に落ちない。私のところに数年間、カウンセリングを受けにきていらっしやるわけです。クライアントのお話することは御法度なんですが、今日の問題とかかわりますので、プライバシーの侵害にならない程度にお話をさせていただきたいと思います。

そのお父さんが、最近、こういうことをおっしゃった。「最初は問題の解決にとらわれていた。何か解決のためのよいアドバイスをもraitたくてカウンセリングに通ってきていた。しかしその後、今度は先生と一緒にどうしたらいいのかを考えるためにカウンセリングに通ってきた。しかし、今は違います。今は先生がそこにいて、安心して心を開いて、問題からの声を聞こうとしていてます。心を開いて問題からの声をきこうとする、そういうことが大事だということに最近、気がつきました」と。

つまり問題に対していかに発想を変え、心を変えていくかが大事なんだということ、最近では思い始めているわけです。カウンセリングへの通い方の違い、問題との向き合い方の違いです。初めは、早く学校に行かせたい。そのためにはどのような方法があるか、アドバイスをもraitたい。そういう問題解決にとらわれた発想で来られていた。ところが今は違う。心を開いて、問題から聞こえてくるものを聞き取ろうとしている。そういう向き合い方になっている。その過程は見失った娘ともう一度「出会う」ための、長い長い旅路だったように思います。

実はこういう旅路は多くの親がたどる旅路なんです。お父さんは立派な教師です。合理的思考で身を固めて、社会的な役割を自信を持ってこなしてきた。世間から後ろ指一つ指されない自信があったわけです。娘がそうならなければ、そのままずっと行っていただろうと。ところが、娘がこうなって、根底から覆された。これまで



での思考の枠を変えて、発想を変えないと娘が見えてこない。娘と出会えない。だから思考の枠、発想を変えていくことで、娘と出会うのではないかという一筋の希望に導かれてカウンセリングに通ってこられる。いろいろな試みをなさっている。そういうお父さんです。「問題」との向き合い方について話を移します。どう

いうふうの問題と向き合うかということが、大事な意味を持っていると思います。不登校とどう向き合うか。普通には、学校に行かなくなった、それが問題だから、問題を解決するのは元へ戻って学校に行けるようになる。これが問題の解決だと普通には思いますよね。大抵の親は教育相談やカウンセリングに来られる時、そういう発想で来られます。「何とか子どもが学校に再び行けるようになるように、アドバイスをもらいたい、いい方法を見つけない」。しかしそういう発想にとらわれ続けている限りは、子どもには出会えない。なかなか、本当の解決には至らない。

## (2) 問題解決と問題消去ー「火事」と「警報」

そこでよく使うたとえば「火事」と「警報」です。火事が起こって警報が鳴ります。消防隊が、学校に駆けつけてきます。警報がうるさくて近所迷惑だと警報だけ消して消防隊が帰ったら何としますか。「何という消防隊や。火事を消さんと警報だけ消して帰った」と思うでしょ。実は不登校という問題は警報と同じです。ただ学校に行けない子どもを学校に行かせたということで問題解決になっているか。実は問題を消去しただけ。警報を消しただけだと私は思うことがしばしばあります。警報としての問題が、一体、何を告げているのか。どういう意味を持っているのか、警報によく耳を傾けて聞き取ろうとする問題との向き合い方が大事だと思っています。実はお父さんはそうなったわけです。心を開いて問題に耳を傾ける。そこから何が聞こえてくるか。そのことが大事だと最近、思い至ったということです。

警報に耳を傾けると何が聞こえてくるのか、何が見えてくるのか。私の表現で言いますと「さよなら」と「こんにちは」が聞こえてくる。「さよなら」と「こんにちは」が見えてくる。カウンセラーとして多少、人の問題に立ち会ってきましたけど、その中で言えることは、人々の出会う問題は古い自分に「さよなら」をして、新しい私に「こんにちは」をする。その過程で生じる戸惑い、混乱、産みの苦しみが問題として現れていると私は思います。だからね、カウンセリングの中での私の役割は、その人が何に「さよなら」をして、何に「こんにちは」をしようとしているのか、しなければならぬのか。そういう発想で問題に耳を傾ける。これはカウンセラーとしての私の仕事なんです。そういうスタイルで不登校の思春期の子どもと向き合ってきたし、そういう子どもを抱えて悪戦苦闘をしているお父さん、お母さんと向き合ってきた。

## (3) 思春期は「第二の誕生」の時ー「さよなら」と「こんにちは」

思春期というのは「第二の誕生」の時だと言われますよね。人生の大きな峠であ

る。「さよなら」と「こんにちは」の大きな峠ですよ。その峠にいる思春期の子どもたちが、あちこちでいろんな問題を噴出させている。それはなぜか。思春期というのはなぜ第二の誕生の時というか。この世的三次元的発想で言いますと、普通皆さんは、20世紀のこの日本に、このお父さんとお母さんを選んで自分で能動的に生まれてきたわけじゃないでしょう。「俺は能動的に選んで生まれてきたんだ」という人がいらっしやったら手を挙げていただきたい。あとでゆっくりお話を伺いたい。いてもおかしくないですよ。四次元的な枠組みで見れば、魂の修行のためにこの状況がふさわしいと選んで生まれてきていると見えることがあるんです。そういう方がいてもおかしくない。私はわかります。でも三次元的なこの世的な発想では、受け身に偶然、生を与えられたというのが常識なんです。受け身に与えられた生を、これこそ私の人生だと言えるような人生へと選び直していく。その産みの苦しみが始まるのが思春期なんです。だからそういう意味で思春期を第二の誕生の時と呼ぶわけです。

受け身に与えられた生を生きてきた子ども時代に「さよなら」をして、能動的に人生を選び直してこれこそ私の人生だと人生を引き受けていく「おとな」時代へと「こんにちは」をする離陸の時でしょう、思春期は。その時に問題が起こる。不登校をはじめとする思春期のいろんな問題は「さよなら」と「こんにちは」の間で生じる産みの苦しみの現れなんだというふうには私は見てきました。とりわけ現在は第二の誕生が、難産になっている。なぜか。それは皆さん方、考えてください。なぜ思春期の第二の誕生が難産になっているか。今日、考えられたらいいなと思っています。

#### (4) 思春期・第二の誕生—難産をもたらすものは何か

上山和樹さん、30代の方ですが、ひきこもりから回復されて、あちこちで活動しています。この方が書いた『「ひきこもり」だった僕から』という本があります。彼が中学時代から不登校になって、その、ずっとひきこもっていたわけです。本の中で「ぼくは自分の意思でこの世に生まれてきたのではない。気がついたら、ここにいた。まわりに得体のしれない世界、いつの間にか成立していた「自」というもの。引き受けようと、努力した。『与えられた自分』を『自分で選び取った自分』に転化させようとして失敗し、途方に暮れてしまったのがあの状態だった」と述べています。まさに私の思っているようなことを当事者の本人が書いてくださった。思春期の子どもを出す問題は、第二の誕生の難産の苦しみが問題として現れているのだと、私はこれまでも見てきたわけです。第二の誕生をどういうふうにも援助する

か、それが課題だったわけです。第二の誕生を手伝えるように親がどう支えるか。それが課題だったわけです。

では、難産をもたらすものは何か。たたき台的に申し上げますと、一つ目は、前回の竹内さんのお話にもありました少年期の喪失ですよね。少年期というのはギャング・エイジと言われますが、子どもたちは徒党を組んで、集団でいろいろ遊んだり、活動したがる時期ですよね。その時期の発達的な意味は、子ども同士の「われわれ世界」をつくる。それを砦にして「大人」が直接管理する、コントロールする世界から脱皮していく。それが少年期の発達的な意味ですね。仲間同士で喧嘩したり、協力しあったりしていろいろな活動をする。その中で集団としての自治をつくり集団として「おとな」の支配する世界から独立していく。そして思春期に入って、今度は集団としてではなく個々として、個人として親離れをし、自立していく。こういうたどり方をしていたわけですね。ところが少年期がとても影の薄いものになってきている。子ども同士がもみ合いしながら自分たちの「われわれ世界」という砦をつくって、大人が直接管理し支配する世界から脱皮していくという営みがとても困難になっている。そしてそのまま思春期に入って親離れ、独立戦争をしていかないといけない。独立戦争がとても悪戦苦闘のものになってくる。こういうことが一つあるだろうと思います。

二つ目は、「良い子」の問題です。三つ目に「自己愛的に傷つきやすいおとな」の問題。そういうものがあると思います。

#### (5) 「良い子」は誰か—どんな人生物語を生きているか

「良い子」って誰か。僕は「誰か」という問いに対する答えは、ある人生物語を生きている主体が「誰か」ということだと思います。僕は大学教授であり3人の子どもの父親である。それは「誰か」ではない。それは「何か」です。僕は「誰か」という時には、僕はどういう人生物語を生きているかを理解しないと、僕が誰であるかはわからない。「よい子」は誰かという問いに答えるためには、「良い子」がどういう人生物語を生きているかに答えないといけない。

私は、しばしば「良い子」についてお話しし、書いてもきました。本の中にも詳しく書いていますが、「マッチ売りの少女」を連想するんです。とても寒い冷たい雪の降る中で、灯と暖をとるためにマッチをする。束の間明るくなる。束の間ちょっと暖まる。マッチをすった炎の中で束の間灯や暖をとるような子どもたち、これが「良い子」。周囲の期待に応え、いい子だと認められることによって束の間、自分を肯定できて安心できる。マッチをすり続けないといけない。存在そのものから

暖まらない。そういう子どもたち。「自分が自分であって大丈夫だ」と、自分の存在そのものから肯定できない、だから一生懸命周囲の期待に応えるようなことをやる。あるいは周囲に都合のいいような自分を演じながら周囲に波風を立てないで、迷惑をかけないでいくことによって、何とか自分を肯定できる。そういう子どもたち。でもそんなふうにして一生懸命「良い子」をやりながらも、決して存在そのもの、丸ごと暖まらない。常に見捨てられる不安にかられている。見捨てられる恐怖にかられて生きている。そういう物語を生きている子どもたちが「よい子」だというふうに私は思いますね。

そういう「良い子」がとても今、社会の中に多くなっているように思いますね。そういう「良い子」たちが、ある日、突然、「あんな良い子がなんでこんな悲惨な事件を起こすのだ」という事件を起こしている。そういう「良い子」の第二の誕生はとても難産になる。難産だからいろんな苦しみ、現れとして問題が出てくるのだと私は思うんです。

#### (6) 大人は子どもと出会えるか—親の自己愛と子どもの他者性

次に、大人は子どもと出会えるかについて。出会えるんでしょうかね。この中にはお父さん、お母さんがたくさんおられると思いますが、わが子とちゃんと出会えていますか。そういう問い掛けは返す刀で私の方にも返ってくるんですけどね。すれ違いばかりしているのではないかなと思うんですけど。こういう問いが出てくる背景には、とんでもなくすれ違っているのではないかという危機感、危惧が大人の中にあるからだろうと思うんですよ。もしすれ違ってるとすれば、どういうものがあるのだろうか。大人の側の問題として考えてみますと、子どもの「他者性」、子どもを他者として心から認めているかどうか。このことが問われるのではないかと思います。

出会うというのは他者と出会うわけです。大人がまず子どもを他者として認めることが必要だと思います。自分とは異なる主体なんだというふうに、頭でわかるのではなく心からそう認めている。それがない限り出会うことはできないんじゃないかと思います。なぜなら出会うというのは、独立した主体同士、人格同士が出会うわけですから、他者との間でしか出会いは起こらない。「それはあたりまえだ、子どもって他者じゃないか」と思うかもしれないが、本当にそのことを心から自覚することは親と子どもの間では難しい。しばしば親は子どもを自分の延長線上のものとして見ているからです。自分から独立した一個の他者として見きれていないのではないかと。そして子どもを愛する場合も「自己愛」の延長線上で子どもを愛してい

る。そういうふうな向き合い方をしている限り、子どもに出会うことばないだろうと思います。他者としてのわが子と出会うためには、親は自分の「自己愛」をコントロールする。そしてそれを越えることができないといけないと思いますね。これは大人の側の問題です。

次に子どもの側の問題。「悪ガキ」と「良い子」。竹内さんの言うように「子どもなんてのは、餓鬼なんだよ。一杯手に負えない悪いことをやるのが子どもなんだよ」。そういう「悪ガキ」だったら、親の言いなりにはなりませんし、親の期待には添ってくれませんので、実に他者であることを思い知らされるわけですよ。だから「悪ガキ」は、大人や親に子どもが自分とは異質な独立した他者であることに気づかせる機会を与えることができるすばらしい子どもである。見ようによってはそうです。ところが問題は「良い子」です。「良い子」は、大人の期待に、親の思惑にぴったりと寄り添ってくれます。そういう「良い子」は大人や親に、子どもを他者として自覚させるチャンスをもたらしてくれない。ぴったり寄り添ってくれますから、合わせてくれますから大人は傷つかない。いい気持ちです。「自己愛」が傷つかない。だから子どもが自分とは異質な他者であることに気付かしてもらえない。そういう「良い子」の問題があると思います。そういう「良い子」が増えれば増えるほど、大人と子どもはすれ違ってしまふ。出会えない。そういうことになるのではないかと思います。

### (7) 子どもの第二の誕生と「第二の陣痛」

では、子どもの第二の誕生を手助けできる大人はどんな大人か。どんな大人なんでしょうかね。皆さんに考えていただきたいんですが、私も3人の子どもの親ですけど下に娘がおります。寒くなってきて、ある日小学校6年生の頃、珍しく早く帰りますと、娘がコタツに足を突っ込んでテレビを見ている。おう、俺も久しぶりに愛しい娘のそばに座ってテレビなんぞを見ようかと、娘のすぐ真横に座ってコタツの中に入ったんですよ。そしたら娘が途端にジロツと睨んでね、なんて言ったか。「お父さん、正直に言わせてもらうけどね、邪魔なんよ」。私は娘の父親離れが始まっていることはわかっているけど、面と向かって「邪魔なんよ」と言われたら、この繊細なハートが痛みますよ。お母さんであれば、思春期の息子たちから「クソババア」「黙れ」「ほっとけ」ときつい言葉をぶつけられている。あれは親からの独立戦争を始めている子どもが、親に突きつける鉄砲玉ですけどね。鉄砲玉をぶつけながら、それを弾みにして親離れをしていくわけでしょう。

そんなことはわかっているけど、可愛かったわが子からの「クソババア」は痛いで

す。ある小学校6年生の不登校の男の子は、「これまでな、おかんのことババアと言うてきたけど、これからはヤマンバにする」と言って、「ヤマンバ」と言い出した。「ババア」くらいの鉄砲玉ではなかなか離れられない。敵もさるもの、こんなデカイおっぱいで囲い込んできますので、そいつから自分をもぎ離そうと思ったら相当きつく蹴飛ばさないと離れられない。「ババア」くらいじゃきかないわけで、「ヤマンバ」となるわけです。

鉄砲玉をぶつけられたお母ちゃんの心はやっぱりちよつと痛みますね。それは第二の誕生を迎えている息子を、もう一度産み落とすための「第二の陣痛」なんですよ。「第二の陣痛」はその時しか味わえない。大学生や大学院生にもなった息子をつかまえて「あのババアが懐かしいからもう一回言うてちょうだい」と言う「アホか」と言われますよね。思春期の子どもの親は思秋期でしょ。下り坂にかかっていきている。思秋期の親と思春期の息子や娘が向き合う時は人生の一時しかないわけですよ。そう思ったらとてもいとおしいですね、そういう瞬間が。「ババア」と言いながら健気に親離れしようとしているんだな。「ババアと言ってくれてありがとう」、そんなふうな気持ちにはならんかもしれませんが、そんな感じになりますよね。

そういう陣痛にちよつぴり心を傷めながらもひっくり返って、壊れてはしまわない。そういう大人でないとあかんということです。新潟は地震で大変ですが、一つの安定が崩れて新しい安定を得るまでの過程で、ガタガタやりながら次の安定を模索しているわけでしょう、地球の中が。思春期の子どもも一緒です。ガタガタやりながら次の新しい自分に「こんにちは」をしようとしている。その地震にしっかり耐えて立ってられる耐震性の強い大人でないと第二の誕生は手伝えない。「クソババア」と言われて壊れてしまい、病気になってしまうような親だったら、子どもは安心して「クソババア」と言えない。揺れながらも壊れない、そういう大人です。

でも逆に揺れもしない、響きもしないガッチリした岩みたいなお母さんもまた愛想がなさすぎるよね。これも思春期の揺れに共感できないのではないかと思いますね。具合と加減が難しいかもしれません。揺れながらもひっくり返ってしまわないで立っているような大人じゃないと、思春期の第二の誕生を手伝うことはできないのではないかと思います。

#### (8) 子どもの第二の誕生を手助けできる大人に

よく親が経験することですが、「これ土産に買って帰ってやったら娘はさぞかし喜ぶやろうな」と、娘の喜び顔を思い浮かべながら買って帰る。しかし、全然期待



通りの反応を返してこない。特にうちの娘はそう。ガックリくる。ちょっとお愛想でも「お父さん、ありがとう、私これほしかったのよ」と言ってくれたら気持ちよくなるけど、そういう気持ちよさをあまり味合わせてくれない娘だったですね。でもだからといって薄情な娘ではないですよ。私と一緒に歩いてくれますし、一緒にインドにも行ってくれた。何を言いたいか。うちの娘はある意味で「良い子」じゃないんですよ。親父に合わせる「良い子」じゃない。早々と「娘は私と違う心で生きてるんや」、そのことに気付かされた。気付かせてもらえた。そういう意味で子どもの第二の誕生を手伝える大人は子どもを「良い子」を枠の中に追い込まない。そういう大人ではないかと思えます。

多くの「良い子」が生まれてる背景には、「良い子じゃないと、見捨てるぞ」という脅しで、子育てや教育をしている状況があると思えます。今の競争原理、生き残りをかけた競争原理が支配する社会の中ではそういうシステムがありますので、いたしかたない面もありますが、脅しで子どもを育てている、教育している。ぶん殴って教育することはわかりやすいですけど、そうじゃない、わかりにくい形で脅して「良い子じゃないと見捨てるぞ」と。そういう脅しですね。口では言わないですね。目つきで言うんですよ。脅しの子育て、教育をやめることができる大人、これが第二の誕生を援助できる大人だろうと思えます。

競争原理が支配する中で子どもと向き合っていますと、ついつい比べる。「太郎ちゃんを見てごらんよ、あんなに勉強しているよ」「次郎ちゃん、あんないい学校に行ったよ」と、他人を引き合いに出してきて子どものお尻を叩く。そういう教育や子育ての中で、子どもは「自分が自分であって大丈夫だ」という自己肯定感が感じられなくて、いつも自分は他人でなければならない、太郎ちゃんや次郎ちゃんであらなければならない。こういう思いに駆られています。そういう子どもたちは自分自身の人生を選び探っていくことが難しくなるのではないかと思えますね。そういう意味では、比べて子どもを追い立てることをしない大人になっていただきたい。

比べて子どもを育てて教育することのもう一つの怖い点は、比べることができるのは身長や体重や学校の成績という部分だけですよ。丸ごととは比べられない。比べ癖のつ



いた目で子どもを見ていますと、比べることができる部分しか目に入らなくなる。そして子どもの丸ごとを見失ってくる。かけがえのない丸ごとの存在を見失ってしまう。あの第一の誕生のとき、親は子どもとどう向き合ったか。あれこれと注文はつけなかったでしょ。元気に生まれてくれさえすればいい。そんな気持ちで、第一の誕生と向き合ってきたんです。その時のことを思い出すべきですよ。この子が元気に生きていてくれること、それだけでいいんだ。丸ごとその子を肯定する。そういうことができる大人は、第二の誕生の援助ができるだろうと私は思いますね。

**野田正人：** どうもありがとうございました。具体的な話で頷きながら聞いておられる方が多かったと思います。

## パネル・ディスカッション

**野田：** 第二部、パネルディスカッションに入らせていただきます。高垣さんのご発題を受けて坂本さん、福井さん、高垣さんにも登場いただき、発題いただいた内容をより深めようという主旨でございます。私は立命館大学産業社会学部、及び応用人間科学研究科の野田です。社会福祉学の中でも思春期の非行問題を専門にしております。親がいないとか、虐待に晒されているところを焦点にしております。今回の流れは高垣さんのご発題を受けて現場の先生方と切り結びたいということでございます。

それでは最初に一言ずつ、自己紹介を福井雅英さんからお願いします。

**福井雅英：** この大学の法学部を1970年、卒業しまして地方公務員を2年、小学校教師を5年、中学校社会科教師26年。この4月から大学の教師をしています。教師生活の中で出会った子どもの姿と大学で教えている学生たちの声を併せて紹介しながらテーマに迫りたいと思っています。

**野田：** 坂本則子さん、お願いします。

**坂本則子：** 東宇治中学で教育相談の担当者をしています。10年前、我が子が突然、学校に行かないと言いだして10年間、我が子の登校拒否、不登校と向き合ってきました。良い子であり、よい母であり、よい教師であった自分をくちやくちやくに潰されて、揺れたり、迷ったり、悩んだりしながら今の職場に復帰したのですが、

本当に今まで80年代の荒れの中で丁々発止と子どもたちと渡り合ってきた自分を一旦、全部投げ捨てて、素手で何も武器を持たない丸腰の状態現場に戻ったわけです。そこで出会った子どもたちの姿、今、教育相談の仕事をしていろいろなお母さんたちと出会い、子どもたちと出会ってきた話をしていけたらと思っています。



**野田：** それでは坂本さんからお話をお願いします。

**坂本：**

#### ①教育相談の担当者として

東宇治中学で教育相談の仕事をしております。自己紹介の言葉として「ワクワクする」と書いたんです。一言では言いにくいですが、子どもたちが見せてくる思春期真っ只中の姿にドキドキしたり、息を潜めて見守っていたり、「あ、ここはあかんで」と飛び出していったり、約束して守るために緊張してみたり、私自身が揺さぶられたりしながらも、かかわっている気持ちを「ワクワクする」というのかなと思います。

東宇治中学は823人、府下の中では最大規模の大きな中学です。今から数年前も有名くらい荒れ狂って暴れて、誰か止めないといけないというくらいの強烈な荒れを経験しました。一方では学校に来る中で、友だち関係で不安になったり、緊張が強かったり、学校に突然来れなくなったり、良い子と言われる生徒が、そういう姿を見せてくることもある。子どもたちから噴出してくる課題、思春期の姿と向き合っている状態です。2学期の感動的な体育祭、合唱コンクール、文化祭という学校中で一種独特の高まった雰囲気の中で、それに乗り切れなかったり、その中でぶつかってしまった問題で躓いてしまうという子や、班替えの人間関係で戸惑ってしまったり、きっかけは大人から見ると些細なことでも、自分が否定されたように感じてしまう子が多いように思います。5月のゴールデン明けと10月の今頃は教育相談は大忙しです。けれども不思議なことに、去年の今頃に躓いた子どもたちが変化を見せてくるのもこの時期の面白さなんです。

## ②相談室で「われわれ世界」をとり戻す子どもたち

宇治市では学校の中に、「クラスには入れないが、相談室の登校ならできるよ」という子どもたちの相談室登校を受け入れています。ふれあい教室という適応指導教室があって、そちらのスタッフとしてもかかわるということで、少人数の、守られた時間と、守られた場所と、見守ってくれる人間と、ぶつかりあう仲間がある空間の中で、子どもたちが立ち上がっている姿もたくさん見えています。立命館大学の院生のみなさんが、宇治市の心と学びのパートナーとしてたくさん守りの空間、ふれあい教室や相談室の援助に来てくれています。そういう中で子どもたちが自分を取り戻していく。子どもたちの「われわれ世界」をつくりながら、いつのまにか、兄弟喧嘩のように喧嘩をしあったりしながら、男の子も女の子も、なんだか今までと違う、失われた子ども時代を取り戻しているかのようです。そんな中で「相談室ってびっくりするくらい元気やな。勉強する力もついてきているね、でもクラスへの壁ってなかなか超えられへんのよね」と言われるくらいです。現在、東宇治中学の相談室には9名、そのうち8名は皆勤賞です。ほとんど休まないんです。学校の中でどっぷり休んでいる子どもたちもいますし、休まず登校していてもとっつんどい状態の子もいます。暴風雨警報が出て「帰りなさい」という放送が流れると全校で「ワー、ヤッター」という歓声上がるのが聞こえるんですね。でも相談室の子どもたちは「えっ、帰らないとあかんの、なんで？」というくらい、相談室の中は楽しくて、休みたくない。少々のことがあっても元気にやってくるという状態です。そんな中で子どもたちとかかわっています。

ただ坂本則子が全校823人の子どもたちに直接かかわるわけにはいきません。前面に立って子どもたちの様子を知り、「授業の時、こんな様子だったよ」と掴むのは教科担任であり、クラスの担任の先生です。私は授業を一切持たずに教育相談の加配をやっているんですね。だから前面に立って子どもたちと毎日かかわっている



先生方の感性、感じ方が私にとっては大事なんです。担任の先生方が感じたことを聞く役、職員室で私のとなりの席は一つ空けてもらっている。その席に、いつでも誰かが来て「こんなやったよ、あんなんやったんよ」という話をしてくれます。

## ③「地震で自信がついた」という

## A子のこと

去年6月、紫陽花の頃に学校に突然来れなくなって欠席が続き、でも最近変化してきた子どもの話をしたいと思います。

A子という女の子。最初は頭痛でした。頭が痛いということでお母さんに、病院に連れてもらって休む。吐き気がしてギョーギョー吐いて、制服を見るだけで吐いて、しまいには食べられなくなって、お姉ちゃんが買ってきた豚マンだけが3日間のうち唯一口に入ったものだという状態までいった女の子です。吐いて吐いて胆汁を吐いていました。そんな状態ですから、本人とはなかなか会えなかったんですね。でも、お母さんとは面談を続けていきました。お母さんから聞くA子の様子に変化しはじめたのは、6月の県祭りの頃だったんです。一年前の紫陽花の季節からちょうど一年。県祭りで買ってきた金魚を育てる話を聞いた頃です。

死にかけた金魚を一生懸命世話をして孵化させていきます。金魚が生き返ってくる。お母さんと面談しながら「A子も、一回、死んだくらいしんどかったんやね」という話をしていました。そんな時、和歌山県で地震がありました。京都も2回にわたって揺れたのですが、2回目夜中に大きく揺れた時、A子が「地震で自信がついた」と言ったんです。「それは、どういことですか」とお母さんに聞くと、「あの子が言うには『頭が痛くても吐き気がしても私の身体が悪いんだ。気持ちがしんどいんじゃない。不登校じゃないと必死で思っていた。あの地震の時、頭が痛かった、おなかが痛かった。お母さん、私の頭ってドキドキすると痛いんや。あの時の気持ちが悪くて吐いたのもドキドキして不安やったからかもしれない』」と。「すごい発見をしたな」とお母さんがおっしゃったので「ちょっと話をしたいな」と担任の先生と、翌日、家庭訪問をしました。

## ④虹のしっぽをつかまえる

家庭訪問をしてA子と会えたのは、はじめてのことでした。彼女が話してくれたことは、Gちゃんという犬のこと、金魚を孵化させて増えたこと。孵化の瞬間を見られたこと。乗馬クラブにも一人で行ったこと。いろんなことを話してくれたんですけど、「先生に話してみてもわかったけど、休んでいる間に私って、結構いろんなことしてたな」と彼女が言ったんですね。「先生、メンタルフレンドがあるってほんま？」「ふれあい教室って、どんなところ？」、「じゃ、次にその話をしに来たいかな」、「来てちょうだい」ということで家庭訪問が繋がっていきました。

担任の先生が苦心しながら子どもたちにかかわってくださっている。言葉の中に見える「虹のしっぽ」みたいなものをキュッと掴まえて、今何か変化が起きている

んやないかな。今、とてもしんどいよね。今は、何か待ってくれてるかな、などと一緒に呼吸して感じながら私は教育相談の仕事をしていると思います。高垣先生が、第二の誕生の話をされましたが、私は第二の誕生の出産の場面に立ち合わせてもらえる素敵な仕事をしているなあ、という気持ちでいっぱいです。

### ⑤引きつった心との対面

もう一方では、お父さんやお母さんが血相を変えて怒鳴り込んで来られる場面に対応するのも坂本なんですね。お父さんやお母さんが、「学校は一体どう思うてるんや」と強い態度で怒って来られることが増えているように感じています。もちろん校長先生、教頭先生が前面に立ってやってくださいます。私は横にいるだけなんです。そういうお父さん、お母さん、子どもたちも何だか突然のように怒りを爆発させる。キレるという状態を表す、子どもたちのちょっと引きつったような姿を見て、子どもたち、お父さん、お母さんと本当に出会うということはどういうことかな。お父さん、お母さんも「バカにされたら困る。自分の子どもを大事に思ってくれているのか」という気持ちから、硬い鎧のようなものを被っておられるような感じを受けるんです。「不遇感」という言葉がぴったりするかなと。「私を大事にしてくれているの?」「粗末にしていないでちゃんと受け止めてくれている?」「きちんと向き合ってくれている?」。鎧のようなものを脱ぎ捨てないと出会えないのじゃないかなという気持ちがしているんです。ですから私は、学校の立場を代弁したり、弁解したりすることを一旦やめて、ひたすらお父さんとお母さんの気持ちを聞かせていただくのです。そうすると、怒り心頭に達しておられたお父さんお母さんが次第に落ち着かれ、逆に「実は、家でも困っていたのです。これからもよろしく」と言ってくださることもありました。

第二の誕生を手助けできるか、出会えるかという問いかけ。「鎧」や「仮面」や「身に纏っているもの」を脱ぎ捨てていかないか、本当の意味で出会えないのではないか。出会える手掛かりも含めて、掴みたいと思ってこの場に参加しました。

**野田：** ありがとうございます。引き続き福井さんお願いします。

**福井：** 最初に教職生活の大半を過ごした学校での体験を話したいと思います。小学校に5年、「中学校に異動する希望の者はいないか?」と言われて、免許を持っていて法学部を卒業したし、「社会科で勝負するのも魅力やな」と思って手を挙げたんです。ズバツとはまって1978年に社会科の教師になりました。ワクワクし

ながら4月に行きましたが、すぐに人生の選択の失敗だったと思いました。学校が荒れてきたんです。大きな学校で生徒数は1,000人くらい、1学年10クラス。行った途端に学校が荒れて、小学校教師の時はドッチボール、キックベースボールで遊んで気持ちよかったのにストレスが一杯たまる。結局その中学校に22年いることになりました。22年の間に何度も荒れの波が押し寄せたんですが、今日、お話しするのは90年代中頃に会った、極めて攻撃的な子どもたちのことを話したいと思います。

毎日のようにガラスが割れ、暴力事件が起こり、教師が止めに入ると教師が殴られるという日々でした。1日3、4件も事件が起こりますと「何考えているんや、こいつらは！」と思って、その子どもらの暴力の背後にあるものが見えなかった。廊下を歩いている真面目な子どもが「お前、なんやねん、目つきが悪い」と殴られる。その暴力の背後にどんなものがあるのか見えずに、教師は「これは許せん」と思う。殴られた子は青い顔をして震えているのに、殴った方は肩で風切って歩いている。「これは許せん」と思うわけです。それが毎日起こる。どうしようもなく追い込まれました。私は学年主任していましたが、一晩に3、4軒も謝罪に回るわけです。こっちもおかしくなる。行くとお母さんに「うちの子、何か悪いことしましたでしょうか？」と聞かれる。これは説明つかない。「いや、廊下を歩いていただけです」と言いにくい。「相手のお子さんや親御さんに謝っていただくことはできないんですか？」とおっしゃる。当然です。しかし、これができません。それをやりに行ってもらい目に合うたことがあります。「実はこういうことで怪我さしたんで、ちょっと電話1本入れてもらえませんか」「うちの子、間違い言うてんのんか」「いえ、そんなこと言うてませんけど」「そうやないか、お前の話、聞いてたら」と巻き舌でやられて。「何もしていない奴を突然、殴りつけて怪我させるのは間違いのするこっちゃ。そうやろが」「そんなこと言ってないんですけど」「何か理由があるに決まってるんや、なんでそういうことをやるのか、それ調べて指導するのが教師の仕事ちゃうのか」などと言われて帰ってくる。

3件ばかり順番に行くと、大体、最後に被害者の親御さんは「先生、わかりましたけど、明日から安心



してやらせて大丈夫なんです」よ確認される。これにも、答えられない。次の日、どんなことが起こるか分からない。モゴモゴ言うて帰ってくる。本当におかしくなりまして、私自身が学校に行くのが嫌で、朝起きると「今日は休む」。こう見えてもデリケートなんですよ。「今週は行くけど来週は休む。2学期からやめや」と遂に2、3言、言わないと学校に足が向かない。そういう事態に追い込まれました。このような暴力を物理的に止めることは到底できません。どうしたら解決できるか。暴力を振るっている子が暴力を振るわんでいいようにするしか解決の道はないんですね。警察へも家裁へも皆、行きましたが、何か月かたったら学校へ帰ってくるのです。

じゃ、この子が暴力を振るうのはなぜかということをつまみきれない。この子の思春期に一体どういう暮らしがあるのかをつまみたい。深夜の家庭訪問を繰り返すわけです。普通の時間に行っただけではありません。深夜に家庭訪問して疲れて学校に帰ってくると、先輩が

言うわけです。「家庭訪問の量は指導の質を変えるからな」「えらいこと言うな、そうやな」と思ってまた行くわけね。へとへとになって帰ってくると「昔からうちの学校の実践は夜つくられるからな」。またこう言うわけで。とにかく教師が子どもの暮らしの現場でその子の暴力を振るいたくなる感情の生まれるところをつまみたいと繰り返してやってきたんですね。そうして掴んだものを教師の間で共有する。私の学年は当時、16人の教師集団でしたが、非常に具体的な、瑣末とも言えるような子どものまなざし、身振りや素振り、家で見えたことを報告、交流して、そうすると「あいつはほんまに許せん、あいつさえおらんかったら、何とかなる」と思っていたのが、「そんな暮らしなのか」となんか可哀相に思えてきた。次の日、「コラッ」と怒っていても「おい、どうしたんや」と声色が変わる。教師の子どもに対する声のトーンや顔つきの変化を、そういう子どもたちは非常に敏感にとらえておりました。最初は会話は全然成立しません。寄っていったら「呼んでへんやろ」と言う。「呼ばれてへんな」と行くんですが、「うっとしいんじゃ、寄るな」。「まあそう言われてもな、用事あんねん」とか言うて、それで近寄って行くわけです。そして何とかこっちの殺気を消して、滋賀県ですから甲賀流忍術があるんですが、忍者のように殺気を消して子どもらと会話や対話が成立するようになりたいと、非常に強く思いましたね。夜中、ほつつき歩いて、家の暮らしを見るしかなかった。家庭訪問してみたら湿った万年床、埃だらけの部屋におる。12時になって帰ろうと思ってもまだ親は帰ってこない。台所に下りてみたら、洗い場に皿が山になって、大分洗っていないこともわかる。油がべとべとついている。部屋の中の臭いは何かと



思うと、カップヌードルに箸突き刺したまま食べさしがいくつもある。「こういう中でおるか」ということがわかって、こういう暮らしの中の思春期をどうイメージするか。そういうのを教師が皆で共有することを大分考えました。

その子らにとっては本当に誇りがほしい、親に依存しながら自立していくという筋道が自分の暮らしの中では描けないという問題がありました。これは階層の問題があると思います。生活の階層。暮らしぶり、暮らし向き、どちらもあると思います。経済的な階層の格差や文化的な階層の格差が色濃く刻印されていると思います。そう思うのは、今、大学に変わって、所属は大学院で臨床教育学研究科という現職の人が来る夜間の大学院の所属ですが、学部の授業も「共通教育」という枠で持っていて、そこで若い学生たちを相手に授業している時に出てくる反応を見ながら、階層の問題は大きいと思いました。

学生たちがどういうことを思っているか。良い子だった子どもの思春期の続きのような物語が毎回の授業であるんです。私のテーマは「思春期の生活世界」です。前期30人が後期なんと100人くらいおる。2コマやるんです。毎時間、感想を書かせていますが、嫌がるかと思ったんですが、一生懸命書くんですね。それをコピー可と印をつけてもらって、縮小コピーをかけて、皆で読み合っ、考える授業をしています。生活綴り方みたいなことが、どこかにあって、結構好評なんです。

今の学生たちは思春期の卒業が遅れているのかなと思うことが一杯あるんですね。それはたとえば、この間、佐世保の小学校の女の子が刺殺した事件を取り上げて家裁の決定の要旨を読み合っ、女子学生ばかりですから「大半は母になるだろう。この家裁の決定を加害者の母の立場で読んだらどう感じるか」と提起して考えてもらいました。この女兒の人格特性が特異なものとは思えず、「一人遊びを好み、おとなしい」など、自分と重なるという感想も多くありました。しかし、母と子が本音で語りあってない、出会っていないということへの気づきもありました。そういうことをやった後の、ある学生の感想です。「私もごく最近まで親の言うことを素直に聞いていました。特に進路に関しては小学生の頃から望まれた通りの進路を進んできました。それ以外の反抗は多少ありましたが、最近になって初めて自分の生き方を大切にしたいと思い、親にそれをぶちまけました。2時間ほどやって、やっとわかってもらいました」。これで、この人は母と出会ったんですね。「『今まで何も言わずに、その通り来てくれたから不満はないと思っていた』と言われました。私は今まであらゆる将来の夢を親の説得によって諦めてきました。可能性の芽を摘まれたと思います。しかしそれを恨んではいません。自分の本当の気持ちを伝えようとしなかった私も悪いと思うからです」。まだこの学生はいい子を完全に

は脱していない。自分も責めながら、そういう出会い方をしているわけです。こういうのは特異な例ではありません。何枚も何枚も母親との葛藤が書かれるんです。

たとえば「思春期はこれまで敷かれたレールを走ってきたのを今度からは自分でレールを敷きながら行くんや」という話をしていたら、「レールという言葉の意味は私にとってまさに自分を悩ませ、心を蝕んできたものであるということに気づきました。学歴を何より大切にする母は、一流大学を卒業し、一流企業に就職することが人生で一番大切なことだと私に言い聞かせ、育てました。何の疑いもなく母の言うことがもっともだと思い、今日まで生きてきましたが、それが私にとって本当によいことだったのか定かではありません」。こういう形で、ずっと書いているんです。「幼い頃から母に洗脳されてきたから、この考えは私に染みついてとれないけれど、何かをする時、ついてくる負担は私の心を大きく蝕み、今もなお私を絶望の底へと陥れることが多々あります」。母に対するものすごい対抗、そこからまだ大学生になっても抜けきれていないところを書いています。

「よい大学を出ていない人は人間じゃないみたいなことを言う母親と私の考えが、佐世保の加害者の子どもを見た時、同じやと考えてしまって、これは私の母と同じ考えを自分もしてしまっているということがびっくりした」という感想を一杯書いてくる。あまりに母に対する批判が強く、「自分が結婚して娘を持つのが不安だ」という。これはまずい、少子化を止めないといかんのに。希望を与えないといかんとおぼえて、母の思春期」というのを次の授業で組みました。母がどういふ思春期を過ごしてきたか。その人たちの母は1955年～65ぐらいの生まれです。思春期は高度経済成長の真っ只中を過ごしてきた。結婚して娘が成長したら、200万円近くの授業料を出して大学に送れる生活を得ている。高度成長期を過ごした母の生活経験に根ざした価値観が子どもに強く出ているわけです。思春期の出会い方について母の思春期も時代の価値観の中で見てみるのが、学生にとっては新鮮で「帰ってから話をし直してみよう」というのでホッとしたんですけどね。

社会の中の自分、社会の中の思春期というのが学生たちにとって新鮮だったので、その後、「1949年の思春期」を採り上げました。「山びこ学校」の実践の中の江口紅一という子どもの作文です。「母の死とその後」という大変な貧困の中で母を亡くして、どうして生きるかという生活と格闘している思春期ですね、戦後すぐの。そういうものを採り上げることによって自分の今の思春期の問題を考えることができました。多くの学生たちが、学歴社会、競争主義、点数受験を自分たちの思春期の壁と自覚しています。中にはそういう学生の中に社会の問題について鋭い子どももいて「大人がレールを敷いて歩めと私たちに言うけれども、大人も大したこ

とないじゃないか。大人だって、大きい目でみれば敷かれたレールを走っているだけじゃないか。それは社会的地位が高い方がいい、収入が多い方がいいという、支配的な価値観に従っているだけじゃない。本当の大人って言えるの？」というが最後の言葉でした。ある学生は勝ち組、負け組と今の社会は動いてくる中で、それに対して強い違和感を感じて「自分組」という言葉をつくりだしまして「勝ち組、負け組、なんやの、そんなんじゃないくて私は自分組でいきたい」。最近では「自分組」が授業の中の流行語なんですよ。勝ち組、負け組の真ん中にあるのではなく、勝ち組の中にもさまざまな葛藤があるでしょうし、何をもちてそう言うかという問題もあるんですが、さまざまに自分組の主張はあるだろうと思うんです。本当にこれが自分組という価値観を社会の中でつくっていきけるような手助けができれば、学生たちに対しても、よい子だった思春期の続きの物語を、自分で書けるようになるのではないかと考えて実践しています。

**野田：** 坂本さん、福井さんから具体的なお話をいただきました。私も数年前、福井さんが言われた学校にスクールカウンセラーとして行っておりまして、視点は一緒なんだろうと思いますが、階層、生活背景、生活課題をどのように盛り込みながら教育現場、第二の誕生の切り口を活かしていくのか。まさに違う現場を見させていただいて、坂本さんのワクワクといいながら悩みつつやっておられる姿もそうだろうなと思って聞かせていただきました。

高垣さん、お二人にご質問があれば聞いていただければと思います。

**高垣：** どうもありがとうございます。子どもの側に焦点をあてるのか、大人の側に焦点を当てるのか迷うところですが、坂本さんの方からは親が怒鳴り込んでくる、親もキレて、という話があったんですが、親自身が鎧を着ている、バカにされてなるものかという突っ張ったような感じで学校にやってこれらる。何かもっと「きちんと尊重してください、私を。軽く扱わないでちょうだい」という親の側の叫びを感じたわけですが、そういう親御さんは最近、増えてきているような感じがするのでしょうか。親が思春期の子どもと向き合っている。そういう親が思春期の子どもの第二の誕生を援助できるような大人に変身していくために何が必要なのか。それを学校の先生目から見て、何かお考えのことがあったら言っていただければと思います。お二人に質問させていただきます。

**福井：** 学校に怒鳴り込まれることは再々ありましたが、後半になると単純に説明

してもわかっていただけない。もつれているなどという感じですね。教師の側も理屈で説明しようとするんです。これはこうで理非を明らかにしてビシッとしたいというのが教師に宿命的にあるものですが、そういう解決がいかない。親の暮らし、その人がそう感じる、考える背景に対する理解、「気持ちわかりますよ」というメッセージを発しながら、どう会話できるかがポイントだったと思います。荒れた時は親は僕くらいの年齢の人が大変だったんですが、戦後すぐに就職もなくて、たくさんヤクザに行ってるんですね。ガツンと最初にやっておかないとうまくいかんというのは、生活の知恵なんです。その子も同じことを言うわけです。そういうことをわかって「ガツンといかんでも心配ないんや、あんたの味方する時もあるのやから、俺」というスタンスでないと本当のことは言えない。そういう部分があると思えますね。

**坂本：** 福井先生のお話を聞いていて、大分前に出会ったK君のことを思い出しました。先頃、その子どもたちの同窓会がありましたので、懐かしくてリアルな話です。80年代の荒れの中で子どもたちが暴れて、学校の中でも何が起こるかわからない毎日でした。女性でも、今夜家に帰って自分の子どもと会えるかわからないという気持ちで、子どもを保育園に送りにいったこともあります。学年主任はいつ刺されてもいように晒を巻いて、本当に刺されたら内蔵が出るかもしれないから新聞紙を差しこんでおかないといけない。そのくらいの覚悟で学校に行かないとやれない時代あったんですね。泣く子も黙るA中学という学校でK君と出会いました。担任になった私が見たK君は「お前、誰や。どこのお婆はんや」「坂本則子。あなたの担任です」と言っても、「聞いたことない、あっち行っとけ」。こんな感じで出会って、次の宣言は「俺は殺人と強盗以外は全部やったぞ。忘れてた。レイプだけはまだやってへんわ」。こういう感じでした。それから1か月もたたないうちに英語の教科担任の若い先生をどついて、自分の骨が折れるんですね。つれていこうとした先生を後ろから蹴って階段から突き落とすという激しい暴れ方をしました。担任する直前、前の担任の先生を7針縫う怪我をさせている。それでも、絶対に謝らなかつたんです。「謝ったら負けや。俺は生まれてこの方、14年間、謝ったことないぞ。謝るもんか」。「これはあかんわ。これではこの子どもと本当に話ができてへんわ」と思って、まだ若い担任の時でしたけど、お父さんに来てもらいました。ところが、お父さんが輪をかけて「なんで謝らなあきませぬのや。ワシは生まれてこの方、謝ったことありまへん」。「ああそうか」と思って校長室で向き合いながら、でも彼は最終的に「ウーン」とこみ上げてくる、嗚咽するものを堪えて初めて

謝るんです。今もって、なんで謝ったのかと思うんですけど。彼が先生を叩いて怪我をした手は、骨が折れてパァッと腫れてきたので、「ほつといたらあかん」と言っ  
て「ええわ」と逃げる彼を私が追いかけて、掴まえて車に乗せて病院につれてい  
った。叱るよりも前に、その病院で二人で話したことが、大事な意味を持っていた  
ように思うのです。

順番を持っている時、救急車の音がする。「救急車乗ったことある?」、「うん、  
ある」。それが初めて人としての会話だったんです。「2歳の時、2回乗った。4  
3度まで熱出ても、母さん、俺の熱に気づかへんかった。それともう一回は母さん  
と二人で車に乗っていて、転がり落ちて、母さんは2カ月の重傷、僕は奇跡的に助  
かった」。「2歳の時からたいへんな人生やったんやねえ」という私に、彼はその  
後、「先生、俺は朝鮮人や。小さい時から朝鮮、朝鮮言われて、言葉でよう言い返  
さんから、どつくしかなかったんや。それをなんで謝れというんや」。そういう深  
いものも話してくれるようになりました。さらに、仲間たちの必死の行動も彼の心  
を動かしました。「小さいH君が足にむしゃぶりついて止めよったんやで。でっか  
いOO君がはがひ締めにして止めよったんや」。そういうことを語りながらだんだ  
ん心を開いていくんですね。「おうおう」と声を出して泣いた彼は、その後2年間、  
いろいろな姿を見せてくれました。卒業の時は「先生、先生のおかげで俺はすっか  
り丸くなってしもた。角もとれて牙もなくなってしまった」。確かに狼みたいな子  
だったんですね。「でもな、先生をいじめるやつがおったら、まだ中学生くらいは  
ビビらす力は残っているから、いつでも呼んでくれよ」と泣きながら卒業証書を受  
け取って卒業しました。

そのK君は、「先生、俺、先生が結婚の仕方教えてくれへんかったから、未だに  
独身や」と言いながら同窓会に現れました。同窓会の帰り道、生徒たちは、「先生、  
俺ら大事にされてたんやな」と言ってくれました。こっちもお酒飲んでますから、  
「あたりまえやん、そんなもん、今頃わかったんか。愛してたよ」と言い返しま  
した。「先生も皆にえらい愛されてたんやな」と言うと、生徒たちも負けずに「あ  
たりまえやん、今頃わかったんか」と言ってくれました。「今思えば、あの時の  
先生、今の僕らと同じ31、32歳やったな」と言って笑い合いました。懐かしい  
話です。その時、今思えば「青春則子」と呼ばれ、何かしから火傷しそうな熱いか  
かわりをしたような気がしています。その間、自分の子どもたちがすごく苦しい思  
いをしていたことも今はわかっています。けれども大事に思われた経験、自分が大  
事に思われていたんだという思いは、やっぱり捨てちゃいけないことではないかな  
と思ったんです。



今も子どもたちが暴れ、荒れている時、またはお父さんやお母さんが「どない思うてんのか」と言ってくる。そんな時でも、いろいろと謝らないといけないこともあるんですが、理屈で説明しようとしてもわからない。ただひたすら話を聞かせてもらう。どういう思いでこられたのか。別のカウンセリングルームできちんと対面して「お話聞かせてください」と話を聞くと、そんな時には怒鳴りもされない。「ナメんなよ」ということもおっしゃらない。ひたすら、お母さんの話、お父さんの話を本気で聞かせてもらうと話し始めてくださるんですね。自分

が生まれた時のこと、自分の子どもが命からがら生まれたこと、など語り始めてくださったお母さんからは、尖ったところや鎧のようなものが溶けていく様子が見えるような気がするんです。学校現場はとでも忙しくて、担任の先生が1時間、きちんと座って話を聞くことがなかなかできない。もちろん私は、カウンセリングができるとは思っていないんです。その分、素敵なスクールカウンセラーの先生が来てくださっていて、そこにつないでいくのが私の仕事だと思います。カウンセリングという専門の知識や手法を知らない私でも、ひたすら聞かせていただくと、和らいでくる。溶けてくる何かがあるなと感じる。ひょっとするとそのあたりに仮面や鎧を脱ぎ捨てる何かがあるような気がするんです。

脱ぐというのはどんな時でしょうか。子どもたちも言いたくない時、触られたくない時、ちょっと触って、聞き出そうとすると、まるでレイプされたくらい感じて「セクハラや」「近づくな」「うるさい」ってすごい勢いで拒否してきます。けど不思議と脱ぎたくなる瞬間ってあるんじゃないかなと、知ってほしい瞬間、おずおずとでも開きたくなる瞬間があるんじゃないかなと思うんです。

**野田：** 私も福井先生と一緒に仕事をしている時期に、ヤクザの息子で不登校になった子がいて、親が「どう落としませをつけるんや」と学校に怒鳴り込んできた。私はもともと家裁調査官ですからヤクザの方は得意なんですね。「あんたも困ってるんやろ」と福井先生以上の巻き舌で。今はその子はそれなりに成人しています。

時々、講演会に行くとヤクザ屋さんが聞きにきてくださって、ファンになっていただいて、少々困ってるんですけど。

ただ難しいのは最近、学校現場では今のようなはっきりコントラストが出るようなクレームのつけ方ではなく、ジトツとした、神経戦を迫られているような、どっちかが潰れてしまうのでは

はないかというような攻め方をしてくる印象を受ける保護者との対峙の仕方がもとめられる場面が多いと感じています。高垣さんのご発題の、どこが誕生で、何が産みの苦しみか見えにくくなっているような臨床像、そんな親、子どもを見ることが多いかと思います。大阪大学の教育学をやっている小野田教授が「学校のいちゃもん」という研究をしています。親がどんなことで学校に文句をつけてくるかという研究です。関心がある方は文献で検索されたいと思います。「なんでこんな雨の日に体育祭をやるんや。標準的な天気みたら雨の確率が高いのはわかっているやろ」と怒鳴り込まれた先生がどうしたかという研究をやっておられます。

学校の中でのナマの話、坂本さんの思いのある話に聞き惚れてしまいますが、フロアからご意見、ご質問をおとりしたいと思います。



**質問：** 宇治市で教員しています。現在26歳ですが、少年期不在、ギャング・エイジの問題、ギャング・エイジというものが形成されにくい。これはいつからそういう形になってきたのか。私自身を振り返ると、そういう時代はあったのではないかと思っていますが、最近、今の20代、30代前半の人たちがギャング・エイジの時代を経験せずに、もしかすると教師や大人になっているのではないかと考えようになりました。ギャング・エイジの時代がなくなっていた、形成されにくくなったのがいつ頃か。メールとかケータイで小学生を含めて群れていることが多い。最近、大阪にできたデパートでも小学生向けの化粧品に子どもが集まって、クラスの中で話題にある。これとギャング・エイジはどう違うかお聞きしたいと思います。それ自体は大人から離れた世界なんじゃないか感じてまして。どんな違いがあるということ。それを経験した子どもが大人になっていく過程での困難をリアルに聞けるとよくわかるかなと思います。

**質問：** 関西大学の学生です。福井先生の話の中で思春期が遅れているのかなど。教育社会学の授業で、寿命が長くなった分、成長する時期の長さが後ろに伸びてきているのではないかという講義を受けて、それと関連しているのかなど。先生は思春期が遅れている理由をどのようにお考えなのかを伺いたいと思います。

**質問：** 怒鳴り込んでくる親の話で、最近の若いお父さん、お母さんたち、近所の人との交流で思うんですが、喧嘩腰で、ものを言わないと負けてしまうということが気になるんです。雨漏りがしました。大工さんが来ます。電話する時から喧嘩ごしなんですよ。「どうしてくれるねん」。うちの主人はそう言うた。そう言うてやらんと来てくれへん。来た人に対してもヤクザまがいの言葉を使って「ちゃんとやってくれへんかったら、うちの主人が後でうるさいね」。お金を出したくない。工務店持ちでやらせたい。それには強い姿勢でやらんとあかん。交通事故で接触する。相手の話でも高圧的に出た方が勝ちやと。最近、目につきますが、それはどうしてなのか。

もう一つは、ある16歳の女の子が、ひきこもりの状態です。公園で若いお母さんたちが集まります。公園デビューですね。「私が初めて公園デビューする時はお母さん、ついてきてね」。若いお母さんが公園に集まるのも自発的に楽しい一時を過ごすために行くのではない緊張感があるのかなど気になります。若いお父さん、お母さんたちの今時の思いの中に、高垣先生の安心感を持って生きていられないことと関係があるのかなど思っています。

**野田：** 最初のご質問、ギャング・エイジについては高垣さんから、思春期に関連して福井さんから。

**高垣：** ギャング・エイジが何で消えちゃったのか。前回の竹内さんのテーマになると思いますが、私なりに事実そうだと統計的に証明できることではなくて、感覚的なことですが、インベーダーゲームが入りました。異年齢集団の遊びの中で子どもの遊び文化が年齢の上の子どもから下の子どもに伝わっていた時期があるんですよ。僕もそうですが、トンボをとる時、糸の端に小石をつけてそれを投げ上げてトンボをとる遊び文化があった。上の子どもから下の子どもに伝わっていた。そういう遊び文化、子ども集団が解体していったことと合わせて、遊び文化が伝わらなくなった間隙を縫って、インベーダーゲームが子どもの世界に侵略してきたんです。まさにインベーダーです。侵略者ですよ。大人が子どもを儲けのダシにするような



遊びが子どもの中に侵入してきた。その末裔がテレビゲームです。1977、78年だったかな。そのあたりからどんどん子ども集団、ギャング・エイジ的な子ども集団が解体していつているのではないか。背景的には1973年がオイルショックで、72年が田中角栄の日本列島改造論。田舎と都会のアンバランスを修正していこうと田園都市構想が出てきて、地域が田園にならずに、街道筋にマクドがあって、ジャスコがあって、パチンコ屋があって、カラオケがあって、どこの地域にも同じような風景が出てくる。そのハシリの頃ですね。里山が解体してくる。田んぼがあり、ため池があって、雑木林があって、カエルがゲロゲロ鳴いているという、そういうバックの中でギャング・エイジは生息していたんですね。そういうものがなくなっていく中でギャング・エイジの存続が危うくなってきたと思いますね。70年代半ば後半以降からギャング・エイジが危うくなっていつているのではないのでしょうか。

質問：ギャング・エイジがなくなった背景と合わせて、子どもたちがつるんでいることは、今でもあるわけですね。ケイタイとかで。

高垣： ケイタイとかインターネットでつるんでいる。それを新たな形でギャング・エイジと言えないだろうかということですか？

質問： 具体的に何が違うのか。

高垣： 一つは異年齢集団があって、遊び文化が下の方に伝えられていくという自前の遊び文化があった。今のインターネット、ケイタイはそういうものがあるのかどうか。とてもお金がかかるじゃないですか。経営している業者がいるでしょ。それに乗って成り立っている。それは昔のギャング・エイジと違うところですよ。それが子どもの発達にどういう意味を持つかまでは、言えませんが、おっしゃるような昔のような集団がもう一度、今の社会の中でつくり直されないといけないというこ



とにはならないと思いますので、新たな形で子ども集団、子ども同士が「われわれ世界」をつくり、大人の直接管理する世界から脱皮していくという世界を、今の時点でどうつくっていくかは新しい課題になるだろうと思います。ケイタイとインターネットが、子どもたちのつながりとどういうふうに関連してくるかについては研究課題にはなるだろうと思います。

**野田：** 福井さんから、思春期の遅れについて。

**福井：** 思春期の課題が遅くなっていると僕は考えていないんですよ。正確に言えば思春期の課題が青年期にかけても引きずっていると考えた方がいいんじゃないか。思春期はむしろ早くなっている。小学校高学年から前思春期ということで、思春期の子どもを見るような観点でみていく必要があると思います。思春期の課題が青年期に引きずられて、なお大学の時期にも「自分のルールは敷きかぬる」という課題としてある。今の青年を取り巻いている社会の状況というもの、社会に出ていってもフリーターしかないじゃないかというような社会状況と重ねて考えないといけないのではないか。青年期は何歳までか、35歳まで、いや40歳までと言う議論があるくらいですから。

若い父親の権威的な対応は若者の中にも、それはあると思います。父親にならなくても。何かちよつとした駐車場のやりとりでも喧嘩腰で、いくという。「脅しの文化」は浸透したと思います。世界的にそうだと思います。イラクの問題もそうだし。社会的な問題で言えば「弱肉強食は当然のことだ」と皆、思うようになってしまっているという、新自由主義的な価値が、我々の日常生活にまで浸透したような問題があるんじゃないかと思います。6月『アエラ』に恰好の教材が出ていました。「今すぐ高めたい私の市場価値」という特集なんですよ。「君らは自分の市場価値を高めたいか。人間的価値と市場価値は一致するか」ということで一時間議論して面白かったんですが、そういうことを言われなければ、「今すぐ高めたい自分の市場価値」と言われたら「そうや!」と思って資格をとりについて、これやってというふうにしてしまう。ごく普通に受け取るような社会的風潮があるんじゃないかと思いますね。だから負けたらおしまい。上に出てガツンとやらないといけない。強い者が勝つ、「そんなん、あたりまえ」となっているのではないかと思いますね。

**野田：** 攻撃的にアグレッシブに怒鳴り込む若いお母さんの話とか公園デビューの関係。私も専門にしておりますので調査したものもありますので意見を申し上げます

すと。ベースには多分、人とのコミュニケーションの基本となる信頼感がないとか、逆にこちらへの不安感を常に持っているという気がします。そのあたりが高垣さんのご発言の中の「自己愛」をどう克服しているか。乗り越えるかということともつながると思います。ご本人はキレているつもりでも何でもないんでしょうが、とにかく気合が入ると攻撃的な表現になってしまう。そのことで対人関係も悪くなり、また本人も傷ついて、堂々巡りされている方とよくお会いします。

親の世代も子どもたちもそうです。少年院のプログラムとか学校の中でも「アサーショントレーニング、自分が切羽詰まった状態の時、どんなふうに上手に表現し、相手にわかってもらい形でやりとりするか。それはギャング・エイジの時に身につけるべき要素も大きいと思いますが、そのへんがとれているのかどうか、因果関係はわかりませんが、そういう訓練を受けていない中で、間の悪い、相手を却って苛立たせるようなコミュニケーションがあちこちに出てくる。マクロ的に言えば、福井さんのように新自由主義というさまざまな背景の見方もあるだろうと思います。そのあたりはまた回を改めて深めていただければと思います。

それでは坂本さん、福井さん、高垣さんの順にまとめの発言を一言ずついただいて閉めさせていただきます。

**坂本：**一言で言うと、私にとって自分との新しい出会いのきっかけは、「わが子の登校拒否」でした。愛し愛され、32歳のすべてを注ぎ込んだようなクラスをつくりながら、一方ではわが子が「もう頑張れないよ、もうこれ以上、いい子どもでいられないよ」と突然学校に行けなくなったのです。自分の頭を壁にぶちつけ、部屋中にムースをまき散らし、大暴れし、娘に至っては頭を丸坊主に剃ってしまうような激しい、出し方で私に向かい合いました。これでもか、これでもかと「お母さん、本当にそんな生き方でよかったん？」という問をぶつけてきました。それまで私は、はっきり言って下りのエスカレータを下から駆け上がるような、元気で潑刺として、「いい教師」でした。一生懸命生きている。誰も文句のつけようがない。そんな母に娘は「お母さん、お母さんがもっと悪女やったら、私はもっと自由に生きられた。私はお母さんみたいに、いいお母さんに育てられてグレることもできなかった」と言いました。そういう突きつけられ方の中で、私は全部壊されて、もう一回、わが子と自分と向かい合いました。それなのに、なぜ生きてこられたか、今この仕事ができているか。それは私の周りのいろんな人たちが支えてくださったからです。親の会や同僚や、何よりもカウンセリングを長く受けておられて、しんどい私のそばにいて興味津々で、「あなたの感性を信じていますよ」と言って、

時には厳しく、時には繭玉のように、時にはヤスリのように磨いてくださった存在があったから、だから今、ここに生きているんだと思うのです。思秋期といえるかどうかわかりませんが、新しい自分との出会いが、確かにあったと思います。

**福井：** 佐世保の事件を扱った時、村山士郎さんという大東文化大学の先生の言葉を学生に紹介したら反響があったんです。「見放されないためなら、どんなことでもする。そういうふうに分かれば理解できる」と。たくさんの学生が、感想の中に強い反応を示しました。ある学生は「この言葉には一瞬身震いするほどの恐怖心とともに、なぜか共感できてしまいました」。その学生は「自分がいじめられたり、辛い思いをした体験と重ねて、過剰に相手に卑屈になり、合わせていって、それが辛かった」ということを縷々書いています。「見放されないためなら、何でもする」ということに共感するような育ちの中にいる多くの学生たちがいる。

そこで求めているものは何か。ある学生は「無条件に自分を愛してくれた体験がほしい。振幅がある、揺らぎを含む感情、性格をも受容してくれる存在が必要であるが、そんな存在には余裕がないとなれるもんじやない。そして現代は余裕がない人々が多い。このように現代日本が、このままの方向に進んでいくなれば命の重さや人生の尊さ、生きていることへの共感はずっと難しくなるかもしれない」と書いているんですね。こういう学生の思いを共有しながら、ミクロの世界とマクロの世界、社会の大きな価値観の問題と一人ひとりの人生の選択、価値観の問題とつなげて考えていくようにしていきたいと思っています。

**高垣：** 「さよなら」と「こんにちは」でお話をしましたが、「さよなら」をしななければならないのに「さよなら」をしきれなくて問題を起こしてしまうことは一つや二つ、僕なんかいくつもあるのではないかと思います。そういう自分なんだということを実感して、そういう自分にウソをつかない、正直に。形を整えている自分が思春期のさまざまな問題にぶつかりますと崩されていく、壊れていくんですよ。まさにありのままの自分で子どもと向き合えないと子どもと本当に出会うことができない。そういうドラマをたくさん見せてもらったわけです。

そういう点では大人自身が正直になっていく。自分にウソをつかないで本心で子どもと向き合うという、大変難しいことですが、真理はとても単純だと思います。大人が自分にウソをつかないで自分と正直に向き合って、子どもと向き合う、そういうことが子どもと出会うために、とても大事なことはないかと思います。それを邪魔しているのが世間の値踏みするまなざしなんです。 「あいつはできる」

「あいつはだめだ」、それが恐くて一生懸命形をつくっている。それを脱げない。正直に自分にウソをつかず、自分に向き合い、子どもと向き合うことを妨げている一つの大きな要素が値踏みするまなざし、評価のまなざしです。それが怖くて怖くて裸になれない。そういう状況の中で、大人は生きているのではないかと思いますね。

**野田：** どうもありがとうございました。今日はここまでとさせていただきます。次回につなげたいと思います。OBの方お二人をお迎えしてシンポジウムを進めることができました。どうもありがとうございました。



